

# 日本語学習に観るクールジャパン効果について： 韓国の高等学校の事例から (国際アーツ&パフォーマンス探究分野開拓への示唆の試み)

青柳 寛

## 1. はじめに

日本の漫画・アニメーションやポップ音楽、アイドルパフォーマンス、あるいはテレビドラマや小説・ライトノベルズは、伝統工藝や名勝などと共に、長らく日本外のアジア地域をはじめ、海外でも多くの人々に注目されてきた。そして新千年紀に入り、これらのコンテンツが「クールジャパン<sup>1)</sup>」(以下CJと略記する)と総称されて以降は、日本政府によるソフトパワーを意識した対外政策のひとつとして活用され、今も外務省による「広報文化外交<sup>2)</sup>」の切札として位置付けられている。実際にCJが、これを好んで受容する海外の地域社会に暮らす人々にどれほどの影響をどのように与えているか(与え得るか)を見定め、今後日本が文化系事業の展開を対外的に図っていくためのヒントにもなる事例を示すべく、本報告では2021年より5年計画で行っている日本学術振興会科学研究助成事業(科研)の共同研究プロジェクト(基盤研究C, 河先俊子代表<sup>3)</sup>)の一部を紹介したい。

1997年、韓国政府は著しく進むグローバル化に対応すべく、大幅な国家カリキュラムの改革を行った。同年2月には、日本の文部科学省に相当する政府教育部によって「第7次教育課程」が告知され、教育内容の個別化・多様化や学校の裁量権の拡大が図られ、各学校の自律的な指導の下に生徒の自主的な学習を促し、学びを体験的に深めていけるような創造性あふれるカリキュラムを効率的に編成・運営することが推奨された(石川2014)。そして日本語教育においては、日本文化の理解と国際交流への積極的な態度を養う点が強調され、そのために情報通信技術(ICT)を駆使し、日本語と日本事情について生徒たちが自ら検索しながらコミュニケーション能力を育てていくことなどが目標に盛り込まれた(三枝2002)。この第7次教育課程は2000年度より小・中・高の間で学年進行順に適用され、2004年度に適用が完成した。その後も大幅な改訂が2007年、2009年、2015年、および2022年に行われ、現在に至っている(石川2014: 80、河先2023等)<sup>5)</sup>。

こうした動きの中でCJの有用性について日本語を教える側と学ぶ側が持つ認識を明らかにし、CJの具体的な活用様式とCJが日本語学習の効率化に果たす役割を見極めるべく、報告者である青柳は2023年3月4日にソウルで開かれた第3回プロジェクト研究会に参加し、韓国教育課程評価院の研究者としてこれまで一連の政策づくりに取り組んでこられた李庸伯氏に話を伺った他、10日までの訪韓中ソウル郊外の漢城高等学校を訪ね、インターネットを駆使した日本語学習プログラムを視察した。また、CJを参照しながら日本語能力を伸ばしてきた3名の元高校生に聴き取りも行った。以下に示す報告内容は、この導入調査に基づく見解と、今後の調査計画および展望である。

歴史的な事情として、日本の植民地から解放され、「軍事政権」として知られる権威主義的な統治下に自民族の復興が強調された1945年から1980年代の終わりまで、日本文化は言葉・大衆文化とも規制の対象であった。しかし、1990年代の民主化を経て韓日両国間の人と情報の流れが活発化するに従って市民間の相互理解と交流を目的とした日本文化の受容と開放が加速し、日本のポップカルチャーと大衆文化が「CJ」のレッテル下にまとめられ、その対外的なアピールが広く認識されるようになった今日、日本文化は韓国でも全面的に開放されるに至っている。そしてこれに応じて、CJに傾倒し日本語を積極的に学ぼうとする新世代の若者たちも数多く出現したのである（三枝2002：41、河先2023：2-3）。

今日、日本語教育におけるCJの効能や有用性を意識しない日本語教育関係者は少なくないはずである。その一方で、日本のポップカルチャーや大衆文化によく通じ、日本の生活慣習やトレンドに関する的確な情報を提供しながら中高生たちに学習指導を行うことができる教員が現時点でどれほどおられるかは定かでない。上記の漢城高等学校では、題材としてCJをふんだんに取り入れながらICTを駆使した日本語のクラスを展開し、「日本語を楽しく学ぶ」ための活動やイベントに関する情報を他の日本語教員たちと共有するオンライン・ネットワークの開拓に尽力する朴允源氏に、日本語教育に関する韓国の現状を踏まえたCJの役割と、そうした日本語学習の将来性について話を伺った。

以下、話を進める前に、「大衆文化」と「ポップカルチャー」の相違について断っておきたい点がある：これまで学界において「大衆文化」と「ポップカルチャー（流行文化）」の区分について様々な議論がなされてきたが、これをまとめたソコロウスキーによれば、前者が「多くの受信者に行き渡るよう設計された統一的なコンテンツ」を示し、後者は多くの場合、「幅広い視聴者に受け入れられる機会のないニッチなコンテンツ」を指す概念である（Sokolowski 2011：312）。これに対し、大衆文化を民衆の日常生活に結び付ける一方、ポップカルチャーを文化産業によって意図的に産み出され仕掛けられる触発的なトレンドとその構成因子となる商品に帰属させる傾向も長らく続いてきた（Storey 1993, Gibian 1997）。

本研究プロジェクトにおいては、現代韓国の文脈で両者をほぼ同義と捉えながらも、日本の植民地支配から解放されて以降の韓国の歴史的な経緯（上述）に鑑みつつ、否定的なコノテーションを残す「日本の大衆文化」に対し、1990年代の開放期を経て、新千年紀以降CJという標示で持て囃されるに至ったコンテンツとそれによって裏付けられた流行文化を総称する概念として「日本のポップカルチャー」を扱う方向でメンバー間の合意がなされた。また、共に人々のライフスタイルに関わるという意味においてポップカルチャーを大衆文化の一部とみなすことも可能であるとした。ただし青柳自身は、あくまで日本語学習に従事する韓国の中高生当事者たち、および日本語教育を指導する政府や民間教育機関の関係者たちの認識に沿って両者の同義性と相違を扱うべきであると考えている。実際、3月の訪韓時に行った雑談に鑑みれば、教育政策者側が日本語教育を促すに当たって想定するCJのコンテンツが人々の日常生活に関わる慣習を軸とする「大衆文化」寄りであるのに対し、日本語によるコミュニケーション能力をブラッシュアップしようと自主的に頑張るコリアの中高生たちが想定するCJのコンテンツが、少なくともその初期段階においては「文化産業によって発信されるポップカルチャー」寄

りである可能性が高く、究極的にこれらの違いにこだわる必要はないとしても、両者の理解に温度差がある点は無視できないように感じられた次第である。

## 2. 日本語教育へのCJの応用とその政策的根拠

### 2a. バックドロップ：第7次教育課程を経た国家カリキュラムの変化

1995年5月31日、韓国初の文民政治となった金泳三政権下で「世界化と情報化の時代を主導する新たな教育体制樹立のための改革案」(5・31教育改革案)が示された(田中2008, 石川2014)。これに次ぐ金大中民主政権以降もその基本的な方針が踏襲され、特に初等および中等教育を対象とした国家のカリキュラム政策においては「人間性と創意性を育てる教育課程」や「学習者の個性と学園の多様性を尊重する教育」の運用が強調され、これを実現させるため1997年に新たな「初等・中等教育法」が施行された。この新法第23条をベースに構成された「第7次教育課程」において「21世紀の世界化・情報化時代を主導し得る自律的で創意的な韓国人の育成」が強調された(教育部2000:4~5頁, 石川2014:81和訳引用)。そして、それまで文法の受講を中心に日本語教育のカリキュラムを組んでいた学校側には、個々の生徒の興味・関心やニーズに合った効率的な学びが最大化されるよう、柔軟なクラス編成が求められた。

こうした方針設定の下、日本語教育は「韓日交流の一翼を担うことができる人材を育成する基礎課程」とみなされた。韓日両国の交流の拡大と深化を予測しながら行われた2007年および2009年の改訂教育課程では、「これまでの韓日相互理解の不足を解消」し、「東アジアの平和の共存と繁栄に寄与」すべく、「文化間の相互理解と円滑なコミュニケーション」の助長が強調され、日本語教育は韓日交流に能動的に対処できる人材を養成する科目として重要視された(河先2023:6)。更に2015年改訂教育課程においては、過去の歴史的な蟠りを克服し、文化的共同体の創出と、そのための文化交流の活発化の必要性が強調され、日本語教育・学習はこれを促進するために欠かすことのできないツールとして位置づけられた(ibid.)。

### 2b. 日本語教科書の分析から明らかになるコンテンツの大衆文化化

こうした動きの中、日本語の教科書も大幅に改訂され、高等学校の場合、日本関連の情報量が韓国に関連したそれを上回るようになり、学習者が日本事情をより詳しくリアルタイムで把握できるような工夫がなされたり、日本人の友人にEメールを送る設定でSNSの利用を意識した朗読文が日本語でネット検索をかける方法の解説と共に示されたり、日本語で挨拶する際の会話が紹介される場面では、本文であるダイアログが挿絵で描かれたコママンガ中に吹き出し形式で記され、「ぼくはマンガが好きです。」といった日本のポップカルチャーに言及した自己紹介表現が追加されたりするなど、動作と言語を結びつけながら現今のトレンドに合った実用性の高い日本語を習得させる意図で編纂されるようになった。加えて、「日本文化散歩」といった日本の生活文化を紹介するコーナーが課毎に設けられ、日本の学校で行われるクラブ活動や、日本で流行っているスポーツ、マンガ・アニメなどを紹介する内容が盛り込まれるなど、生徒たちの興味を引きライフスタイルに直結した学びが意識されるようになった(三枝2002:41, 河先2023:2)。

2007～2015年の改訂教育期間中、レベル別の日本語教科書に示された文化項目を詳しく分類し、教育課程ごとに項目の出現頻度を分析した河先によれば、この間に「教育課程でコミュニケーションに役立つ文化」が強調されたことを受け、相槌、ジェスチャー、お辞儀の仕方、贈答、「身体的な接触を避ける」、「相手に対する配慮から間接的に表現する」といったコミュニケーションに関わる日本的な表現項目がほぼ全レベルの教科書に示されるようになり、「前もって日時の約束をする」、「手土産を持っていく」、「靴を揃える」といった訪問時のマナーを解説する教科書も多く出現した。また、年中行事、お祭り、高校生活、国土・気候・通貨など、日本での生活に関わるための基本的な情報や、伝統衣装（着物や浴衣）、食文化、住居、交通、観光スポットの紹介が、初等に当たる『日本語Ⅰ』を中心にほぼ全ての教科書で提示されていた。そして、2009年改訂教育課定期以降の中等レベルの『日本語Ⅱ』においては、環境保護やリサイクルが話題として取り上げられると共に、マンガ・アニメ産業の発達に関する記述や、コスプレ、キャラクター商品、映画、ゲーム、ドラマ、紅白歌合戦等に関する記述も所々に観られるようになった。加えて、第6次教育課程期の教科書まで目立っていた日本の植民地支配や侵略の歴史に関する記述が第7次教育課程期以降は殆ど観られない点が明らかにされた（河先2023：8～10）。

## 2c. 今後の政策目標

2023年3月4日にソウルで開催された本研究プロジェクトの第3回研究会では、韓国教育課程評価院に所属の研究員でいらっしゃる李庸伯氏に、2022年に告知された新たな教育課程に関する詳しい話を伺った。それによれば、今日のグローバル化社会において「隣人とコミュニケーションを取り、コミュニティの一員として生きる」ために不可欠な能力を育み、「歴史と文化に対する理解に基づいて相互に協力できる世界市民」を養成し得る必須教科の設置を新たな理念とするこの2022改正教育課程において、日本語学習は「日本人と直接コミュニケーションを取り、日本文化と日本に関する情報を正しく理解するきっかけとなり、誤解と偏見のない協力関係を構築していくことができる重要な積み石」と捉えられている。

こうした枠づけの中で「歌、マンガ、アニメ、ドラマ、映画等」と銘打たれた「日本の大衆文化」は、「依頼の方法、承諾・断りの方法、敬語の使い方、呼称の方法、表現的特徴等」の「言語文化」、「手振り、身振り等」の「非言語文化」、「行政区域、地理、人口、気候等」の「日本の概観」、「家庭生活、学校生活、社会生活、交通および通信、衣食住、年中行事、スポーツ、祭り、幸運祈願、環境等」の「日常生活文化」、そして「観光名所、重要人物等」を指す「その他」と並ぶ知識・理解の対象として明記され、生徒たちがこれらのコンテンツを「直接的に経験」できるよう、調査・整理を行いながら日本語の教科書を編纂し、クラスで展開されるコミュニケーションにも取り入れ、ICT関連の媒体をうまく活用しながらオン/オフラインで配信・共有していくことが推奨されている。

こうした方向転換が、今ではすっかり日常化したインターネット技術の利用環境とこれによってもたらされる絶え間のない外部——この場合日本——からの情報の流入、あるいはスマートフォンを不可避の媒体としながらSNSにアクセスし続け、グローバルトレンドのタイ

ムリな吸収を慣習化した現代韓国の若者たちのライフスタイルへの「必死！」ともいえる政府側の対応である点を察することができた。これについて李氏は、研究会後の雑談の中で次のように述べて下さった：

政府がいおうがいうまいが、今の若者たちはSNSを駆使してトレンドな情報を吸収することが当たり前な時代がきたわけで、こうした動向を見逃したり疎かにしたりしてしまうことなく、それを政策にしっかり反映していくことが、教育政策上のミッションだと思っています。生徒たちに、自分たちが当たり前に行っていることの文化的な意義を伝え、目標意識を促すことも、政策者の重要な役目ではないでしょうか。

グローバル化の波はトレンドな情報のやり取りにとどまらず、流行りの商品や流行に敏感な学生たち自身を巻き込みながら「トレンドなハングアウト」を各所に形成する。東京のそれと殆ど見分けのつかないソウルの中心街では、韓日のクールが融合したような空間で双方の言語によるコミュニケーションが図られたり、そうしたコミュニケーションが可能な場が展開されたりする。ベック（2000）のいう「一国の枠組みに収まらない経済的で社会的な場」として機能する「コスモポリタンな行動、労働、兼生活空間」が形成されるのである。そしてこうした場を生活の基準や拠り所とするトレンド志向な韓国の若者たちの多くが、好んで日本語を学ぼうとする姿を想像することも難しくはない。韓日の文化交流がこうしたコスモポリタンな都市の形成ばかりを想定しているとは思えないが、トレンドに敏感で、情報化されたモノや体験の絶え間ない消費を活動源とした生活様式と切り離せない日本語学習が促されていくことは確かであろう。

### 3. 授業参観から垣間見えるCJ教育の実践と今後の課題

ここで改めて、日本のポップカルチャーと大衆文化の総称として「CJ」を便宜的に使い、CJを活用した日本語教育を「CJ型教育」と、そしてこれを活用した日本語学習を「CJ型学習」と呼ばせていただくこととする。

ソウルの南大門区にある男子校こと漢城高等学校で日本語教員を務め、インターネットを駆使した日本語学習をクラスルームの内外で生徒たちに促してきた朴允源氏によれば、日本語を学ぶ韓国の中高生たちはリアルタイムで日本事情に通じようとCJに関する情報消費に夢中になっている。曰く：

今の生徒たちは、ただコンテンツの閲覧を楽しむだけではなく、アニメやバラエティー番組に使われている日本語表現のニュアンスまでつかみ取ろうとします。特に流行語には敏感に反応し、それが醸し出す雰囲気までの確に捉えようとするのです。そうすることがトレンドで、折に触れて掴み取った表現を使うことがカッコイイと感じているようです。その一方で、これまで文法を中心に日本語を教えてきた年配の教員たちは、その殆どが現代日本のライフスタイルに通じているとはいい難く、トレンドな表現をリアルタイム

で学生たちに十分手解きできるとはいえません。今では教員たちにも「生きた日本語」をタイムリーに使いこなす能力が求められていますが、未だ実際にそれができる教員が十分揃っていないのが現状です。

こう語る朴氏は、2001年に「Japanese Teachers' Association (JTA)<sup>6</sup>」と称するオンライン・コミュニティを数名の同志たちと立ち上げ、教員間で日本語教育関連の活動とノウハウに関する情報を共有しながら、生徒たちがリアルタイムで日本の言葉と文化について楽しく学べる環境づくりに取り組んできた。今ではJTAの会員は1万人以上となり、イベントやフォーラムも開催されるようになっていく。朴氏はまた、2009年から高校の日本語教科書の編纂にも携わっているが、それ以前の教科書は全て大学の専門教員が主筆を務め、高校教師が主筆を担当することはなかったため、画期的な出来事だといえるであろう。「エデュテインメント」ないし「エンターテインメントの要素を取り入れた学び」——つまり「トレンドに乗りながら日本語を楽しく学んでいくこと」——を現代韓国における効率的な日本語学習の要とみなす彼は、CJを題材としたスキットを盛り込んだり、日本人の先生をモデルに登場させたりと、斬新な構成を発案することで第7次教育課程以降の政府による教育改革の要望に答えている。

2023年3月7日、下見調査を兼ねてソウル入りしていた青柳は漢城高校に朴氏を訪ね、彼が担当する授業を参観させていただいた。朴氏が学校側と申し合わせながら単独で構成したという日本語教育専用の教室には、PCが完備された36名分のデスク席（1デスク2席座席）が設けられていた。周囲の壁は、折紙や日本語プログラムの広告、あるいは日本の風景を表象したポスターで彩られ、教壇側には大きなプロジェクト・スクリーンと白板が設置され、それらの両隣にはひらがなとカタカナの解説板が掲げられていた（画像1）。



画像1. 漢城高等学校での日本語授業の様子と朴允源氏（2023年3月7日報告者撮影）

当朝のクラスが始まる直前、朴氏はネットでYouTubeにアクセスし、2016年に公開されて間もなくジャパニメーションとしては世界歴代興行収入第1位に輝いた大ヒット作品こと『君

の名は。』<sup>7</sup>の主題歌でもあるRADWIMPSのヒット曲『スパークル』に乗せて編集された当映画の名場面（複数カット）が流れる動画を開いた。教室が映画館かライブ会場のような雰囲気満たされた矢先、13名の生徒たちが次々に入室してきて授業が始まった。朴氏は、日本の若者たちが挨拶を交わす姿を示す動画や、日系の若手コメンテーターが日本と日本人のライフスタイルを楽しくリアルに紹介する番組を見せながら、文法ベースの学習では捉えることが出来ない日常的な表現を日本の慣例や物産と共に生徒たちに紹介し、そこから文法を含む表現法に焦点を当てていく手順で授業を展開した。中には落ち着きのない者やフードをかぶったまま居眠りの振りで受講するジャケット姿の生徒もいたが、朴氏は咎めたりすることなく淡々と解説を加えながら授業を進めていた。そして究極的には、生徒たちはみなその日学ぶべき表現を掴んだ様子で、授業が終わるや早々と退室していった。

この時点では中高生を対象とした聴き取り調査に関して倫理委員会への手配に至っていなかったため、当日の受講生たちにインタビューを行うことができなかったのは残念だったが、朴氏に彼らの学びについて話を伺うことはできた。それによれば、エデュテインングな動画を挿みながら日本語の会話へと生徒たちを導き、そこから更に読み書きへと導いていくことで、概ね効果的に学ぶべき日本語表現を学ぶことができていると感じており、CJのコンテンツを盛り込んだ日本語の遊学には、文法の補足と共に欠かすことのできない利用価値が確かにあるとのことであった。ただし、機械的な操作によってネットコンテンツを応用しながら連日クラスを展開することで、筆記能力の助長が疎かになりがちであると訴えてもおられた。生徒たちの文字離れは韓国の日本語教育に限られた現象ではなく、スマホやPCがメジャーな日用コミュニケーションツールとなった現代においては、あらゆる言語に共通した課題であろう。

#### 4. CJ型学習の効能：元高校生への聴き取りから得られた理解

CJを応用した日本語教育の効果について、学習者である生徒たちはどのような認識を持ち、自分たちはCJ型学習にどのように取り組んでいるのか？CJを題材に用いながら学校で教わる日本語と、自主的なCJ型学習によって把握する日本語の間に違いはあるのか？～あると感じているなら、それはどのような違いなのか？そして、CJ型学習の先にどんな人生の進路なり活動の展開なりを想定している（いた）のだろうか？

現時点では現役高校生への聴き取りが未だできてはいないが、CJを利用した独自の学習に久しく取り組むことで日本語コミュニケーション能力を著しく伸ばしてきた3名の元高校生たちに話を伺うことはできた。この3名は共に20代半ばで、ソウル市内の日本語学校で学んでいた先輩1名とその2名の後輩たちで、先輩格のCさんは日本の大学への留学を果たし、青柳が担当していたゼミで指導を受けながらポップカルチャーの研究に従事し、大学院の修士課程まで進んだ学生だった。青柳のリクエストに快く応じて後輩たちにも声をかけ、自身は日本に滞在中だったためリモート形式で上記のリサーチクエストに詳しく答えてくれた。そして、後輩のお二人——IさんとKさん——とは3月5日と8日にそれぞれソウル市内で話を伺った。3名とも幼少よりCJにハマり、日本のアニメやドラマ、あるいはポップ音楽を多分に参照しながら日本語をブラッシュアップした経緯を有していた。時間制限もあるので、本発表ではこの

3名の内の、特に参考になる意見を提供下さったCさんとKさんの事例を、以下の通り一部紹介しておきたい。

#### 4a. 日本への留学を果たして思うこと

Cさんは幼いころ目にしたスタジオジブリのアニメーションをきっかけにCJにハマり、広く日本の大衆文化へと探究領域を広げながら日本の言葉と文化の理解に努め、やがて日本の大学への留学を目指すようになった。そして日本語学校に進んで猛勉強した末に留学の夢を果たし、優等な成績で大学院修士課程に進んで日韓ポップカルチャーの比較研究を行い、2022年に論文を書き上げて修士号を取得した。彼にとってCJの探究と吸収は、日本語の「体得」（自身の言葉）と同等の意味合いを持っていた。曰く：

自分にとってCJと日本語は切っても切れない学びの対象でしたし、今も、これからもそうだと思います。マンガとアニメを片端から読んだり観賞したりして、学校では絶対に学べない日本語の繊細な表現を学び、ドラマや音楽番組からトレンドイヤーな言い回しを把握しました。韓国の書店でも購入できた日本の情報誌を見てファッションやライフスタイルや、日本の名所や環境や商品と物価についての情報を得ていました。日本の歴史については、歴史教科書と歴史系のアニメを交互に参照しながら把握していきました。

CJを「人生の道標」とみなし、母国に戻って自身が培った日本語コミュニケーション能力と文化理解が活かせる職場を探り当てようとしていたCさんにとって、学校で行う日本語教育は「基礎的な知識と居場所」を提供してくれる機関「でしかなかった」。曰く：

高校生の頃、履修していた日本語のクラスで先生がマンガを見せてくれたり、主な観光地や名物をクラスで紹介したり、自身の渡航体験を話してくれたりすることはありましたし、使っていた教科書にも日本の伝統や生活に関する情報が掲載されていて、ある程度は参考になりました。でも、どことなく物足りなくて、特に先生自身が体験していない日本について語られる時、提供される情報の的確性に疑問を抱くことも沢山ありました。結局、学校では国語の正しい読み書きなど、基礎的な知識を得るに止まり、そこから先は自分自身で検索しながら学び、今のコミュニケーション能力につながりました。学校は、基礎知識を身に着ける場として日本語学習に十分ではなくとも、必要な場ではあると思います。学校という所属または肩書があることで日本語学習者としての自覚とアイデンティティは持てましたし。

中高の学校におけるCJ型教育の導入意義について尋ねてみたところ、Cさんは当然ながら、導入への共感を示した：

ネットソースも勿論ですが、最近では日本のアニメや、村上春樹の作品など人気小説から



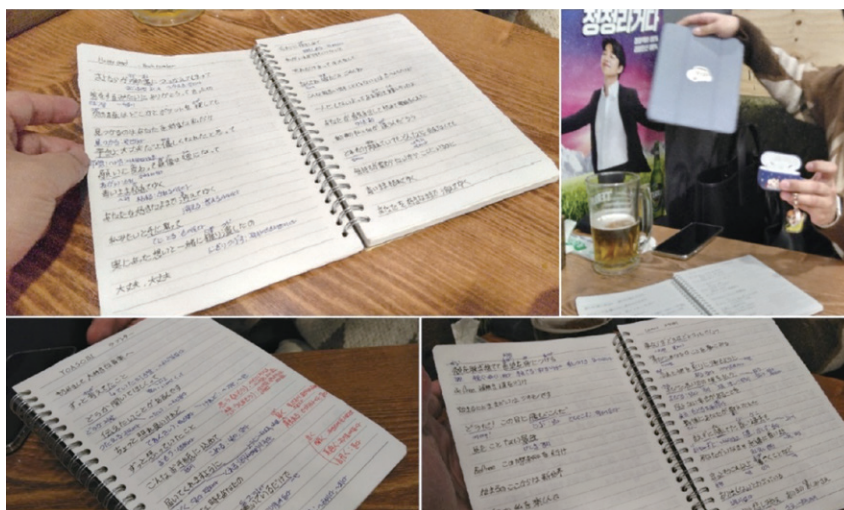
も、タイムリーな日本語表現を多く学んでいますし、そんな学びに後押しされて、読み書きの能力ももっと身につけようと頑張ることができていると感じています。CJが日本語を学ぼうとする今の韓国の中高生を啓発し、それ自身が日本語や日本事情を学ぶためのテキストや参考資料になることは明白ですし、学校でもアニメやJ-POPや番組をもっと導入しながら日本語を教え、そこから日本の歴史や伝統文化についても体系立てながら楽しく学んでいける環境を提供してほしいです。大学レベルの日本研究科にしないまでも、それに連なるような日本の言葉と文化の学び場を、大学を待たずにつくってほしいです。

就活に専念している今、Cさん自身がそんな場づくりに貢献する意思がないか問い質してみたところ、日本語教員免許を取得するための指導を受けることも、自らその方向で勉強をすることも視野に入れてこなかったのが「不覚でした！」と悔やんでいた。

#### 4b. 韓流モデルとしての活躍も視野に入れたCJ型学習

J-POPとJドラマのマニアを自称するKさんは、Cさん同様、高校生の時分からネットでCJ関連の情報を吸収しながら今日まで日本語の勉強を続けてきた。高卒後Cさんと同じ日本語学校に進み、更に大学に進学して経営学を専攻していた。日本への留学の夢は未だ果たせていなかったが、出来ることなら将来日本での就職もしたいということだった。その一方でK氏はモデル事務所に所属しており、将来は一介の韓流タレントとして韓日の双方で活動を展開することも望んでいたが、競争は極めて激しく、その路線にあまり期待できないことも自覚しており、タレントとして活躍できなければ、辞して会社——できれば日系の企業——に勤務したいと述べていた。

雑談に臨むに当たり、Kさんは自分が高校の時分から書き溜めてきた日本語学習帳を見せてくれた。その中には、彼がネットでフォローし続けた歴代のJ-POPやドラマに登場した流行語や聞き慣れない言葉、あるいは気になる表現や用語がびっしり書き溜められていた（画像2）。



画像2. Kさんが披露して下さった日本語学習帳の一部（2023年3月8日報告者撮影）

今ではタブレットも利用しているが、ノートに直接手で書き込みながら学んでいく方が断然身に着くそうである。マンガやアニメもCJ型学習の材料にしていたが、「作品によって表現が幼稚だったり、逆に難し過ぎたりするものばかりで、馴染み難い感が強い」ため、より「理解しやすく、日常会話への応用性も高い」ことが実感できる流行曲の歌詞やドラマのセリフをピックアップしながら独自の日本語学習を展開してきたそうである。更に彼は、NHKのサイト<sup>8</sup>で年末毎に発表される流行語を欠かさずフォローし、日本の時代的な移り変わりを楽しく捉えてきたという。

こうした形で日本語を時代に沿って詳しく学習することに、自身の好みや興味以外にも何らかの意義を見出すことができるのかどうか問い質してみたところ、K氏は自身のタレント活動への有用性を指摘した。曰く：

今ではK-POPのタレントの多くが日本語をマスターして日本でも活躍していますので、自分もそれくらいのことはやりたいです。CJをはじめ日本の文化や繊細な言葉使いによく通じることで、単純に日本語が話せるという以上の能力を身に付け、(翻って)韓国でも日本のことを詳しく紹介したり、解説ができたりするタレントを目指したいです！[括弧内は報告者の加筆]

最後に、自身で行うCJ型学習と学校で体験する日本語教育との比較について尋ねてみると、彼もまた先のC氏同様、学校で学ぶ日本語はあくまで基礎的なもので、そこから先は生徒が自分(たち)で自主的に学んでいくしかないとの見解を示した：

そもそも「学ぶ」って、自分から積極的に世界に働きかけながらやることで、学校で先生たちから授かる教育は、その受容を余儀なくされる生徒たちにとっては、少なくともはじめの内は魅力的ではないと思います。でも、先生によっては、ヒントになる情報や学び方を教えてくれます。また、学校で指定される教科書も、内容によって興味をきっかけになる情報を提供してくれるので、自分はその情報を選んで、自分で調べながら、音楽やドラマを視聴することと合わせて勉強してきました。

このように、「基礎知識を得るためのツール」としての学校や教科書の存在価値は否定できないことが理解できた。同時に、自習の大切さも確認でき、概ね先述の2022年教育課程が目指す方向に上手く応じるような学びが既に意欲的な日本語学習者たちによって実践されている点を確認された。

##### 5. まとめとして：「国際アーツ&パフォーマンス」探究分野開拓への示唆

今回の報告では、現在科研の共同研究として進めている調査の一部を紹介する意図で、報告者である青柳が担当している「日本のポップカルチャーおよび大衆文化を活用した日本語教育」——名付けて「CJ型教育」——への政策側の期待と、そのような教育の効果について、予備

的な調査に基づく見解を示してみた。未だ本格的なフィールドワークができていない現状での推理であるため、紹介した「CJ型学習」の部分は特に、今後詳しい聴き取りを行うと共に、何らかの参与観察を施しながら、「Cool Japan」と総称した日本のポップカルチャーと大衆文化の韓国の中等日本語教育上の利用価値に関する検証を試みて参りたい。

ヨセフ・ナイは、その著『ソフト・パワー』の中で「ある国の文化が普遍的な価値を示し、その国の政策を通じて他国が共有し得る価値や利益が促される時、その国が望む成果が達成される確率も高まる」と述べ、その国が他国を文化的に魅了する外交力を「ソフト・パワー」と名付けた（Nye 2004）。そして彼は、CJが世界的に受容されてきた世界と、そんな世界の中で日本が国として保ち続けるスタンスを批評し、次のように述べている：

1990年代の学者たちは、政府と産業界の緊密な連携によって日本が情報化時代におけるソフトパワーを発揮し、国際社会における政治経済的な主導権を握ることができると考えていた。しかし、ソフトパワーに資源を動員する日本の能力は未だに十分ではあるとはいえない。なぜなら、政治的なバックアップの弱さ、社会経済的な規制緩和による更なる国際化の必要性、移民や文化交流に関して開かれた地域主義への抵抗、そして世界で広く通話されているとはいえない言語が影を落としているからである（p.87）。

そしてナイ氏は、日本の文化が依然として内向きであり、第2次世界大戦とこれが及ぼした歴史的影響と率直に向き合うことに日本政府が消極的である点が、この国が所有する素晴らしい文化資源ないし知的財産をソフトパワーに変える能力から妨げていると主張する（2004:87-88）<sup>9</sup>。CJを「日本のソフトパワー」とみなすことができるならば<sup>10</sup>、未だこれまでのCJ戦略への取り組みや、海外からの評価が官民を問わず日本側の発信者たち（国民を含む）に十分意識されていないという、日本政府も認めている点<sup>11</sup>を「文化資源のソフトパワー化が不十分」という上記のナイ氏の指摘に加筆することができよう<sup>12</sup>。

日本のことはさておき、ナイ氏の批判的な示唆を先取り・解消する勢いで日本から発信されるCJを巧みに日本語教育に取り入れ、国際人材の育成による将来的な外交力の増強を図り、自ら国力をアップさせようと努める韓国側の取り組みと、斯様な政策的意味づけや整備を待つことなくCJを楽しく消費・吸収し、トレンドとして自分たちの日本語コミュニケーション能力を向上させてきた若者たちによって発揮されるコリアン・ソフトパワーの様相については、今回の調査からも少なからず把握することができた。

4月12日のフォーラムでは、発表後のオープンディスカッションにて2点の有意義な質疑をいただいた：「実際に学習者はCJを通してどこまで日本の国力を意識しているか（し得るのか）？むしろ、より広く『人間的な魅力』を想定しているのではないのか？」；「韓国の政策者や日本語教科書の編纂に関わる識者たちは『日本のソフトパワー』の限界を意識してはいないのか？あるいは、どこまでCJの可能性を認識しているのか？」というものであった。無論、これらの点は今後の更なる調査に委ねられる部分もあるが、CJを「国の魅力」としての「国力」として感じ取る学習者は当然予測でき、だからこそ上記のC氏やK氏の如く、そんな「魅力的

な日本」の文化を吸収し、日本に行ったり韓日の双方で自身の活動の場を求めたりすることに、たとえ明確な意識とはいえなくても、一種のセルフ・エンパワーメントを感じる（感じたいと望む）学生も存在すると考える。「国力より人間的な魅力」を生徒たちがCJから感じ取り、CJに求めていることも、ジブリの作品や「自分らしく生きる」ことを美徳とした歌詞に代表されるCJのコンテンツから大いに察せられることもまた確かであろう<sup>13</sup>。とはいえ、政策者側の観点からすれば、こうした「人間的な魅力」もまた、ソフトパワーとして利用しながら国力を増強させていくための道具になり得るのではなかろうか。そして、日本語教育政策に対する展望という意味では、CJの可能性と限界について前もって「どこまで・どこから」という見通しをつけようとするよりむしろ、状況（流れ）をフォローしながらこれからも巧みに教育課程を改訂していくのが、韓国政府のより本質的な態度ではないかと考える。

オープンディスカッションの場ではもうひとつ、調査の進め方に関する質疑があった：「今後、具体的にどのような聴き取りや参与観察の実施を想定しているのか？」；「例えば半構造的なインタビューも手法として取り入れる予定はあるのか？そしてその場合、どのような文脈の設定を考えているか？」；「聴き取りは調査の中でどのような位置づけを持つのか？聴き取りが行われる設定状況を予め想定しながら調査を進めていくのか、それとも状況に対して臨機応変に対応するといったゆるやかな形での実施を考えているのか？」などである。これについては現時点で少なくとも青柳の側で状況——対象者の人数や現場環境——の把握そのものが未だできていないため、ある程度試行を行った段階で順次ご指摘の手法について検討しながら、方向性を見定めていこうと考えている～というに留めたい。斯様なスタンスを「お粗末」と酷評される先生方もおられるであろうが、これは決して「場当たりに調査を進める」と宣言しているのではなく、柔軟な対応によって多角的なアプローチで、理想的には半構造的な聴き取りもゆるやかな対話形式も取り入れながら、その間のデータの信憑性をも比較検討しつつ、調査を進めて参りたいと考えている。

最後に、今回の発表を動機づけたもうひとつの根拠に、CJの学術的調査を視野に入れた「国際アーツ&パフォーマンス・スタディーズ（K-APS）」のプログラミングへの野望がある点を告白しておきたい。これも当てずっぽうなジョークなどでは毛頭なく、CJの魅力が世界的に注目され、アニメツアリズムや忍者体験が温泉旅行やクラフト体験と共に海外の若者たちを惹きつけて止まなかったり、CJをテーマに論文を書きたがる学生たちが世界的に後を絶たなかったりする今日、国や地域を問わず、CJを窓口とする現代日本の文化・社会——延いてはその歴史的・伝統的根拠——について居ながらにして学べるコース編成もまた、学部の魅力になり得ると考えてのプロポーザルである。CJに対する海外の認識や評価に関する調査・研究を踏まえたCJのコンテンツ創作——延いては日本文化の再考——を可能にするK-APSプログラムは、本学部既存の6分野にも連動しつつ、例えば韓国でCJ型学習に耽っているような中高生たちに、将来の留学先ないし知的なエンパワーメントを図る学び場を提供してくれるのではないだろうか。

日本語学習に観るクールジャパン効果について：韓国の高等学校の事例から(国際アーツ&パフォーマンス探究分野開拓への示唆の試み)

## 〈参考文献〉

- 石川裕之「韓国における国家カリキュラムの革新とグローバル化」『教育学研究』第81巻第2号、2014年、78～90頁。
- 河先俊子「日本大衆文化開放後の韓国の高等学校の日本語教育—教育課程と教科書の分析から—」『21世紀アジア学研究』第21号、2023年、1～18頁。
- 教育部『第7次教育課程の概要』教育部、2000年。
- 知的財産戦略本部（日本政府編）『クールジャパン戦略』、2019年。
- 田中光晴「韓国における初等教育改革への取り組み—「世界化」政策の現状と展望—」『九州大学大学院教育学コース院生論文集』第8号、2008年、83～98頁。
- 趙英男「創意的体験活動教育課程変遷に対する研究」『初等教育研究』第25巻第3号、2012年、235～256頁。
- 三枝優子「韓国の日本語教科書事情」『教育研究所紀要』第11号、2002年、39～42頁。
- Gibian, Peter (ed.), *Mass Culture and Everyday Life*, Routledge: 1997.
- Napier, Susan, *ANIME from Akira to Princess Mononoke: Experiencing Contemporary Japanese Animation*, Palgrave: 2000.
- Nye, Joseph, *Soft Power: The Means to Success in World Politics*, Public Affairs: 2004.
- Sokolowski, Marek, 'Mass culture versus popular culture', *Proceedings of the 7th Annual International Scientific Conference* ("New dimensions in the development of society"), Jelgava, Latvia, October 6-7, 2011, pp.308～315.
- Storey, John, *Cultural Theory and Popular Culture: An Introduction*, Prentice-Hall: 1993.

## 〈注〉

- 1 内閣府ホームページ>内閣府の政策>知的財産戦略推進事務局>クールジャパン戦略>クールジャパン戦略について ([https://www.cao.go.jp/cool\\_japan/about/about.html](https://www.cao.go.jp/cool_japan/about/about.html)) 参照 (2023年3月10日閲覧)。
- 2 外務省ホームページ>外交政策>広報文化外交 : <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/index.html> 参照 (2023年3月15日閲覧)
- 3 詳しくはKAKEN <https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-21K00606/> を参照のこと。
- 4 研究会では日本語教育の国家カリキュラムに関する各種のデータが質と量の双観点から紹介され、その一部を今回の付属研究所フォーラムでも投影した。しかし、守秘主義的配慮から、本報告書への掲載は控えることとし、要点を文章としてまとめるに留めた。
- 5 第7次教育課程以降は、これに補足や修正を加える「随時改訂体制」が導入された(趙2012: 238)。改訂のサイクルも短縮かつ不定期になり、部分改訂を含めれば毎年のように何らかの改訂がおこなわれている。また、改訂に当っては第7次以前のような回数で示すのではなく、改訂年を冠して行われている(石川2014: 80)。
- 6 詳しくはJTA公式サイト (<https://www.jteacher.net/>) を参照 (2023年3月7日閲覧)。
- 7 公式サイトは<http://www.kiminona.com/> (2023年3月15日閲覧)。また、記録的な世界歴代興行収入に関しては、アニメーションビジネス・ジャーナル (<http://animationbusiness.info/archives/1913>) などに詳しい (2023年3月15日閲覧)。
- 8 [https://www3.nhk.or.jp/news/special/heisei/feature-articles/feature-articles\\_02.html](https://www3.nhk.or.jp/news/special/heisei/feature-articles/feature-articles_02.html) (2023年3月8日閲覧)
- 9 こうした批判的な立場はネットのブログ、[nippon.com](http://nippon.com) > 政治外交 > 文化 > 国際的ブランドとなった日本のマンガ・アニメ > 日本のアニメ、“ソフトパワー”としての実力を問う (2015年2月10日付、<https://www.nippon.com/ja/in-depth/a03902/>) (2023年2月24日閲覧) 等に観ることもできる。
- 10 内閣府ホームページ>内閣府の政策>知的財産戦略推進事務局>クールジャパン戦略>クールジャパン戦略について : [https://www.cao.go.jp/cool\\_japan/about/about.html](https://www.cao.go.jp/cool_japan/about/about.html)、日経ビジネス>クールジャパンとは？世界に発信される日本の魅力とその課題 (2022年5月11日付、<https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00081/031000338/>) などに沿った論点。
- 11 知的財産戦略本部(編)『クールジャパン戦略』報告書(2019年9月3日)参照。
- 12 Yahoo! Japan ニュース>エキスパート>クールジャパン機構失敗の考察…日本のアニメも漫画も、何も知らない「官」の傲慢(古谷経衡著、2022年11月28日付、<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/b5b31b1f350f368c82bb7ca64598cde0f9e4eae5>) (2023年3月8日閲覧) も参照のこと。
- 13 例えば、欧米における日本のアニメーション研究では第一人者というべきスーザン・ネイピアが、CJの「汎人的な魅力」について言及している：ジャパニメーションの場合、アメリカ合衆国の若手視聴者たちがアニメの主人公を「日本人」としてより、同じ人類とみなし、迫られた命や人生に関わる大問題を解決しようと頑張るその姿に共感しており、そうした意味で日本のアニメキャラクターは明らかに国や地域を越えていると指摘する(一般社団法人国際経済交流財団 > Cover Story > Why Anime? [<https://www.jef.or.jp/journal/pdf>] 参照(2023年4月12日閲覧)。同様の指摘はNapier (2000: 9～10) にも見受けられる。